
屋上の少女

弓日川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋上の少女

【コード】

N6072V

【作者名】

弓日川

【あらすじ】

自殺しようとする少年が、おかしな少女と出会う話

少年、少女と出会う

昼休みの屋上が、俺のお気に入りの場所だ。

何故か他の生徒は寄りつくことがなく、ここはいつもとても静かだ。春の暖かい風が吹き抜ける。

空は澄み渡るように蒼い。

日射しは柔らかく身体を包み、どこからか桜の良い香りが漂ってくる。

死ぬには良い日だ。

そんな事を思った。

前々から考えていた事だ。

鞆から用意しておいた遺書を取りだす。中身を一応確認する。靴を揃えて置く。

まるで再放送のドラマのように、一連の動作はひどく機械的で緩慢的だ。

一か所だけ屋上のフェンスが壊れている場所があつたのでその縁に立つ。景色がとても綺麗だ。眼下には人々が暮らす街がどこまでも続いている。心地よい風が頬をなでる。

そしてそのまま虚空への一步を踏み出し、重力に身を委ねて僕はこの世に別れを告げた。 告げた、はずだった。

「ねえ、どいてくれない？私、そこから飛び降りたいんだけど。」

こんな声さえ聞こえなければ。

俺はその日からの事を忘れることはないだろう。それが彼女との出会いだっただ。

あれから10分ほどが経過した。しかし

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

どうしようもない沈黙が続いている。

なんなんだろうこの人は。

自分がかかり混乱してしまっているのがわかる。

まさか声をかけられるなんて。あんなタイミングで。

そして今現在、なんで俺は彼女と並んで座ってるんだろう・・・意味がわからない。

どうにも間がもたなくて、ついついマジマジと観察してしまった。

端正な顔立ちだ。

人形のような壊れやすさをはらんだ美しい瞳。

長い睫毛。白い肌。

腰まで届きそうな長くて艶のある美しい髪。

個人的にポニテなところがいい。凄く良い。

声をかけてみるべきだろうか。

でも飛び降りたいとか言ってた人だしなあ。

そんな危ない人に話しかけたくないな。

そんなことを考えていると横から凄い音が聞こえた。

「ドドドドドドドドドドドドドドドド」

「・・・・・・・・」

・・・なにこの音怖い。ひょっとして腹の音だろうか。

でもこんな腹の音出せる人なんているんだろうか。多分デスピサロくらいにしかできないだろうな。

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

「・・・・・・・・」

また鳴ってる・・・こええ・・・世界が滅んじやいそうな音だな・・・

。

「一応昼休みなんで昼飯は買ってあるんだが、渡すべきなのか。」

「アー……アー……エンニャ……アー……アー……！」

「（ライオンの王!?!）」

「デレデレデレデレデレデーデデンツ！」

「（データ消えた!?!）」

「これだけ腹の虫でアピールしてるんだからそろそろそのご飯渡しなさいよ」

「わざとかよこのデスピサロ!?!」

世の中には凄い人間がいたもんだ。

「ガツガツガツガツ……」

結局並んで座って飯を食う事になった。

まあ食ってるのはこいつだけなんだが。

それにしても人の飯をうまそうに食うなこいつ。

俺も腹減ってきた……全部渡さなきゃよかった……俺の焼きそばパン……!

「で、貴方は今何をしようとしたの？」

「それは……」

なんだかここで正直に白状するのも嫌だった。

漢のプライドである。

「空を、飛びたくてね」

「そついうのいいから」

「すいません……」

「で、自殺であってるの？」

「……まあ」

「そりゃそつでしょうね、遺書あるし」

「あ、返せよ!」

「嫌よ。学校の裏掲示板で実名付きで晒して時の人にしてあげるわ。」

「

った。

それは中学に行っても高校に行っても変わらなかった。最低限の会話くらいはするが、誰かと「話す」事はほとんどない。家においてもそれは同じだった。

兄は成績優秀で人付き合いもうまく、当然両親の関心も兄にしか向かなかった。

俺は家庭でも徐々に空気になっていった。

そうして俺は居場所を失った。どこにいても誰がいても一人。でも別にそれが辛かったわけじゃない。

ただ、ふと未来の事を考えたんだ。

このまま大学に行って社会人になって年老いても、俺は今とんなら変わる事はないんだ。ろくなつて。

そうして俺は一人で誰に知られる事もなく、世界の片隅で死んで行くんだろくなつて。

そんな事を考えてると、なんか虚しくなつてな。

よく言うだろ？人がほんとに死ぬのは皆から忘れられた時だつて。だとすると誰にも記憶されてない俺は始めから死んでるようなもんだ。

それで、色々な事がどうでもよくなつたんだ。

正直人生何もうまく行つてないし、生きてても明らかに辛い事の方が多い。

だったら別に無理して生きてる必要もない。

死ぬのなんて結局早いか遅いかだし、このまま惨めな人生を送るくらいならいつそ自分から死のうかな、つてな。」

語りながら俺は疑問に思った。

なんでこんな事をつい30分前に知り合つた奴に話しているんだろ

う。

この本音を誰かに聞いてほしかったからだろうか。

それとも、こいつの雰囲気、どこか自分に似ているように思えた

からだろうか。

「・・・まあ、てな具合だよ。これで満足か？」

「気持ち悪いわね・・・」

「うっ・・・」

あまりにシンプルな回答に流石に少し傷ついた。

「このNってやつ」

「ゲームの話かよ！ポケモンやんな！人の話聞けよ！！」

「うるさいわね。貴方、自分の話がポケモンより面白いと思ってるの？とんだ自惚れね！」

「お前が無理やり言わせたんだろ！？」

「そうやってすぐ人のせいにする・・・全く小さい男ね」

「ぐっう・・・！」

呆れて言い返す言葉も出ない。

「というか、お前の話も聞かせるよ。なんでお前は・・・」

キーンコーンカーンコーン

丁度そこでチャイムが鳴った。

「あら、もうこんな時間」

そう言っただけ彼女は立ちあがり、こちらに背を向けて歩き出した。

「今日の予定は中止ね。飛び降り禁止」

「あ・・・オイ！」

「何よ」

思いつきり睨まれた。

「あ・・・遺書返してください・・・」

我ながら凄い低姿勢だ。

「んっ・・・、お断りするわ。」

「え、ちょ、ちゃんと事情話しただろ！？返せよ！」

「誰も話したら返すなんて言っていないでしょう。何勝手に勘違いしてるの？」

「な・・・!」

なんて奴だ。このままでは俺は日々掲示板に遺書を晒されるかもしれないというストレスと闘わなければいけないではないか。

ギャバが主食になるかもしれない。

あれって本当にストレスにきくのかな・・・。

そんな事を青い顔しながら考えていると彼女が声をかけてきた。

「そうね・・・そんなに返してほしければ、また明日、ここで逢いましょう。」

そう一方的に告げると、彼女は校舎へと続く扉を開けて出て行ってしまった。

・・・本当に何者なんだ・・・

色々考えたい事もあるし言いたい事もある。

しかし、とりあえず今わかつている事は、遺書が無いと俺は死ねない、という事だ。

少年、少女と出会う（後書き）

少し前に友人に原作として渡した話を文章化してみました。
拙い文章ですがよろしくお願ひします。

少年、少し悩む

その翌日の昼休み、相も変わらず俺は屋上に来ていた。例のフェンスが壊れている所の縁に座り飯を食べる。

やはりここから見える景色は絶品だ。

死ぬならこういう綺麗なものを見ながら死にたい。

が、今はそれができない。遺書だ。あれが手元に無いと不安で夜も眠れない。

正直かなり恥ずかしい事が書いてある。他人に読まれたら口封じもためらわないだろう。

そりゃ恥ずかしい事だって書くよ。だって遺書だもの。遺書だもの！あの遺書を取り戻すまでは俺の日常に安息が訪れる事は無い……！そんな事を悶々と考えていると、屋上の扉が開く音がした。

「あら、今日のご飯食べてるのね。それが貴方の最後の晚餐かしら？」

「是非ともそうしたいから早いとこ遺書を返してくれ」

そんな皮肉な事を言いながら彼女は現れた。

「せつかちね。せつかちな男は嫌われるわよ？そんなんだからモテないのよ。貴方あれね、デートに遅れた女の子を責めるタイプね。」

『やあ、15分23秒の遅刻だね』とか細かいところまで覚えてるタイプね。なんて心の狭い……。」

「なんで出会い頭に想像でそこまで責められてんの俺！？だいたい俺はデートに遅刻した女の子を責めたりしない！寧ろ『おいおい、3時間も待たせるなんて俺をどれだけドキドキさせる気だYO』って言うタイプだね！」

「それはそれでないわ……。」

「え？そう……？」

正直自分でもイケてると思ってたのに……。

「大体、遅刻なんてする方が悪いんだよ。楽しみのデートなら遅刻するなよ。」

「わからないわ。世の中にはどれだけ努力しても間に合わない事があるのよ。」

「なんだそれ。例えばどんなのだよ。」

「すみません、向かい風だったもので」

「もっと流線型になれ！」

「遅刻の言い訳考えてたら遅れたわ」

「ナメてんのか」

「ハッピーターンの粉こびりついてとれへんかってん」

「何言つてんだお前！？」

「貴方の怒った顔が見たくて……でもやっぱりそんな貴方も素敵！」

「ぐ、ううう……可愛いから全部許す！」

「ふっ」

「勝った！みたいな顔すんな！」

こいつの笑顔ほんとに可愛いな……。なんだよこの無駄な魅力。

「はぁ、無駄に疲れた……。なんでお前とこんな漫才みたいな事しなきゃならないんだよ……。」

「美少女と漫才じみた事をするとか、貴方の人生で2番目くらいに幸福な出来事じゃない？」

「俺の人生ナメんな！」

あれ……。でもよく考えたら……。いや、この思考はやめよう。きつと死にたくなる。もうなってるけど。

「で、貴方は今現在とてもおいしそうに購買の焼きそばパンを食べているわけだけど」

「だから何だよ」

「わからないの？これだから童貞は……。」

「馬鹿にすんな！後15年したら魔法使えるんだぞ！」

「ふっ」

「ほんとその嘲笑止めてください心にくるんで・・・」

「わかったよ。で、私の分は？」

「は？」

「聞こえなかった？私の分はどこにあるの？」

「・・・え、いや聞こえたけどさ・・・」

こいつ、もしかして自分中心に世界回ってんのかな・・・こいつう人間ってほんとにいるもんなんだな・・・無いとか言ったら確実に罵倒されそうだし。しかし無いものは無い。ならばきっぱりと言おう。それが漢。

「んなもんねえよ」

「・・・えっ？」

「いや、だから何で俺がお前の飯買ってこなきゃならねーんだよ」
そう言っただけ俺は残りの焼きそばパンにかぶりついた。

「・・・」

「・・・(ウルツ)」

捨てられた子犬みたいな顔された！反応が意外すぎる！！なんだこの罪悪感！？

「ちよちよつと、あのなんていうかあwse d r f t g yふじこー」

「・・・」

「冗談よ。パン啜えたままそんなに慌てる喉につまらせて死ぬわよ」

「ちくしょう！」

軽く騙された。表情が自由自在だこの女・・・。悲しき哉純情すぎるマイハート。

「ていうか別に死んでもいいんだよ。お前が遺書さえ返してくれたらな。」

「ふうん、そういえばそうだったわね。」

別段興味も無さそうに彼女は呟いた。

「それはそうとして、お腹が空いているのは本当なの。今とても空腹だわ。だから、それ、一口わけてくれない？」

そう言いながら彼女は迫ってきた。

「きゅ、急になんだよ・・・!?!」

「一口だけでいいのよ。だから、オ・ネ・ガ・イ」
そうわざとらしい艶っぽい声で言いながら彼女はますます迫ってくる。

近い。近い近い。顔が近い。押し倒されそうな距離だ。

彼女の長いポニーテールが頬をかすめる。とても良い匂いがした。
間近で見る彼女の顔はやはりとても美しく、ああもうこのまま成り行きに任せよう、行くとこまで行ってしまおう卒業おめでとう!・・・
・なんて考えていたら

「なーんてね!冗談冗談!」

と突然明るい声が出た。

続いてドンツ!という強い衝撃。

そして、俺の身体は宙に投げ出された。

「・・・!?!」

信じられない。

え?押された?なんで?死ぬ?

だって、この高さから落ちたら死ぬだろ。

死ぬ。高い。死ぬ。死ぬ。死ぬ?俺が?

なんで・・・死・・・?

そこまで考えたところで突然グイツと強い力で後ろから引かれて投げ飛ばされた。

世界がグルングルン回転する。

ゴッ！

背中を床に打ち付けたそのままの勢いで屋上を転がっていく。体中にコンクリートが襲い掛かる。

ゴオン！と屋上の扉にしたたかに身体をぶつけて俺の回転はようやく止まった。

「ゲホッ！ゴホッ！かはっ……」

混乱した頭で痛みを耐えつつ、必死に息を整えていると上から声がした。

「ごめんなさい。少し力を入れすぎたわ。」

「ゼイ……ゼイ……」

俺は息を整えるのに必死で何も言い返せない。

そんな俺に、クスクスと笑いながら彼女はこう言った。

「……にしても、随分面白い顔をするわね。

貴方今、まるで

“死ななくてよかった”

って、そういう顔してるわよ。」

さらに次の日の昼休み。

あらゆる場所において空気である俺の日常に変化があるはずもなくいつものように俺は購買へ行つてパンを買い屋上に向かっていた。

昨日は散々だった。殺されかけるわ遺書は取り返せないわ。……

ほんとになんだったんだあれは。一歩間違えれば、あんなの、完全に殺人だ。今日こそあいつの真意を問いたださなければ。名前すら

知らないあいつの真意を。

「あら、今日は少し遅かったのね。死ぬのやめちゃったのかと思っ
て心配したわ。」

屋上に入るとそんな声が降ってきた。どうやら先に来ていたようだ。
「……そんなわけないだろ。ちよつと売店で何買つか迷っただ
けだよ。」

「ふ〜ん。迷う事もあるのね。貴方の主食は米じゃなくて焼きそば
パンだと思っていたわ。」

相変わらずな事を言ってくる彼女の前にドサリとビニール袋を置い
た。

「……?」

「やるよ。今日も昼飯食えなかつたら死に切れないからな。食った
ら遺書返せよ?」

「私に……?」

ふふふ、動揺しているな……しかしこれは作戦!こうやって彼女
の警戒心を解いてやるのさ!名付けてオペレーション『E Z U K E』
!

「……」

彼女はまだ目を丸くして驚いている。そんな表情は珍しく中々に気
分がいい。彼女は袋に手を伸ばすと少し微笑んだ。

「でもやっぱり焼きそばパンなのね。」

「文句言うなら返せよ」

「いえ……ありがとう。私も焼きそばパン好きなのよ。凄く、嬉
しいわ。」

「いや、別に……」

彼女は本当に嬉しそうにパンの袋を開けた。綺麗な笑顔だ。

そんな彼女の素直な表情も言葉もとても新鮮で、今度は逆に俺が驚
く番だった。

やっぱり根はいい奴なのかな……。

「ちなみに遺書は忘れたわ」

ちよつとそう思ったけど別にそんな事は無かつたぜ！

「なんだと！？どこに！？」

「さあ、なんかどつかそのへんに」

「アバウトすぎる！人の物は失くさないようにってお母さんに習わなかつた！？」

「まあ、私はもうあの遺書読んだから別にいいのよ」

「何その自己中心的思考！？恐ろしいなお前！ていうか読んだのか！？」

「それにしても……あの内容……ぶふう！！」

「やめたげてよお！それ以上を俺を傷つけるな泣くぞ！」

しばらくそんなくならない会話を繰り返して昼飯を食べていると、彼女が唐突に聞いてきた。

「貴方……生きるってなんだと思う？」

「……は？何だよ急に。自殺志願者に対する宗教勧誘はお断りだぞ」

「そんなんじゃないわよ。ただ貴方の考えを訊いてみたいだけ。」

「……そうだな。人生って死ぬまでの暇つぶしだろ。死ぬまでにいかに楽しく過ごせるか。それが人生の意味って考えてる。死んだあとなんて、もう終わりなんじゃないのか？要するに寝てる状態がずっと続くだけ。遅かれ早かれ皆絶対そうなる。」

「だから別に死ぬのはいつでもいいと？」

「そういう事だな。死ぬまでに合計幸福値が高かつた奴が勝ち組みなのさ。んで俺は未来に幸せな自分を見出せなかつた。だからダラダラ生きていくのもめんどくさいし、死のうかなくてな。」

「ふうん……そうやって現実から逃げようとしてる自分を正当化してるってわけね。」

「……なんだよ、やけに絡むな。お前には関係ないだろ。」

「そうね、その通りだね。貴方の人生に私は無関係。欠片も知らない貴方の生き方に私が口を挟もうなんてのは筋違いな話。自分の命は自分の好きにできるべきだね。でも……」

「でも？」

「きつとつまらないわよ、死ぬ事なんて。きつとね。」

「……」

何故彼女がそんな事を言ったのか、その時の俺にはよくわからなかった。

そう言った彼女の横顔はいつものようにどこか悟ったような仏頂面だったけど。

でも俺には、悲哀と後悔に満ちた彼女の泣き顔が見えた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6072v/>

屋上の少女

2011年10月9日11時00分発行